

【資料】

昭和 40 年代の工業高校で見たこと

Memories of Industrial high school life as student -1965～1968-

長谷川晴通（元国鉄職員）

Harumichi HASEGAWA

要旨：昭和 40 年に入学した工業高校は教師の暴力が横行する所ではなく安心して学生生活を送ることができる場であった。こういう環境は実は若い教師にとってもやりやすかったのではないかと考えている。新設校だからこそ何にでも意欲的に取り組めたのではないかと、このようなことについて、一部は女性司書の言葉も借りて紹介する。

1. 中学校の学年同窓会

筆者の母校は学区および市内に多くの重要史跡があるからなのか有名進学校の合格者が多いためなのか、教師が「名門〇〇中学」という言葉をしばしば口にしていた。

ここを卒業して半世紀ほど経った頃は新型コロナが猛威を振るう前だったので、学年全体での同窓会を実行することになった。

卒業生の約 3 割が出席できたことで宴会は大いに盛り上がったが、恩師代表の「乾杯の音頭」が長かった。

「当時は皆さんに厳しい指導をしてしまったこともありまして、……………」と詫びる言葉が延々と続いたのである。

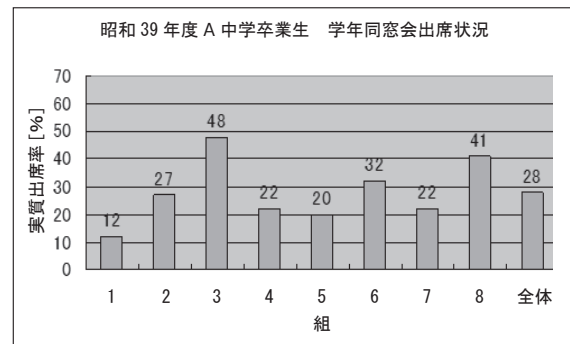
母校では教師のビンタやパンチが横行していた。黒板に額を打ち付けて反省せよと迫られて生徒が数回行くと、教師が怒って生徒の後頭部を持ってぶつけたこともある。これは筆者たちの教室で行われたことである。

「人間の条件」を通じて軍隊の内務班における私的制裁という言葉を知っていたため、教師が指導の名の下に正々堂々と暴力を振るうのを見ながら「この学校は軍隊よりも凄いい。」と思ったものだ。

付図 1 は学年同窓会のクラス別出席状況である。出席者が一番多かった 3 組は「乾杯の音頭」をとった先生のクラス、8 組は温厚な先生（筆者たちの恩師）のクラス、6 組は「今日はどこまで飛ばすかなあ？」と言って怖がらせることもあったが、それでも皆から慕われた音楽教師のクラスである。

出席率最低はソ連大使館が発行していた「今日のソ連邦」を読むのを勧めたり、常時持っているステッキで、男女の別なく生徒を叩いたりした女教師のクラスである。

図 1 中学校の学年同窓会出席状況



同窓会開催準備および実施作業時の数値より
(平成 30 年 5 月 20 日実施)

2. 工業高校に入学して

筆者は担任の先生が選んでくれた県立工業高校の機械科に入った。新設の校舎で先生も先輩方も親切なので入学後の数日間は快適な気分で過ごしていた。だが、半月が過ぎても教師の暴力はないし先輩も威張らないので、かえって不安な気持ちになってきた。

次第に「このままで終わる筈はない。」と思うようになってきたのだ。

だが、その心配は見事に外れた。この新設工業高校でそれは全くなかった。

昭和 40 年代から 50 年代には実業高校、中でも工業高校の生徒はよく荒れたようだが、筆者たちのいた時代は平穏であった。

- ① 先生が暴力を振るうのを見たことがない
- ② 先輩から暴力を振るわれたことがない。
- ③ 同学年での喧嘩を見たことがない。

筆者たちはこんな学校で高校生活を送り、卒業後は恩師の出席を仰いで何度も同窓会を開いてきたのである。

3. 工業高校の同窓会

筆者たちの担任はフリーハンドで円を書くのが得意で、授業の資料も試験問題も全ての円を自力で書いた。皆がこのことに気がついたのは、先生がダイヤルゲージの絵を黒板に目いっぱい大きく描いた時である。

大きな拍手が起こって皆が囃し立てた時、先生は悠然と「技術者になるヤツらがこんなことに驚いてどうするだ。」と言って授業を続けた。休み時間に黒板用コンパスで中心を決めてその線をなぞってみると、ほぼ真円であったため先生の評価は一気に高まった。

先生は悪さをして喜ぶ私たちに「お前らのことなんか知らなあ！」とよく言われたが、それを聞きたくて何度でも悪さをした。

先生のお名前の中には「竜」の文字があるので、アダ名は最初からタッチャンだった。

高校生活最後の体育祭で、私たちは大きい張り子の龍を作った。当日にこれをクラスの全員で担いで練っている時、いつもは静かなタッチャンが大きな声で笑った。

リーダーの「タッチャンが笑ったぞお！」という叫び声に励まされ、悪童どもは先生に手を振りながら何度も何度もグランドを練り歩いた。

先生が最後にクラス会に出て下さったのは 92 歳の時であった。先生は多くの病気を抱えておられたので、有志が車で浜松までお迎えに行き、菊川の会場に来ていただいた。

この時まで先生はずっと円を書く練習をして下さったようだが、「丸が書けなくなっちゃったので今日はテストにする。小学生の問題だから方程式は使わない。全員できるまで吞ませんぞ。」と幹事に 2 問が書かれた紙と鉛筆を渡した。

最初から試合放棄した者もいたが、多くの者が一斉に取り組んだ。だが、結局誰も解けなかった。先生が「思い知ったか！」と満足そうな顔をされたのが今も目に浮かぶ。

先生のトイレを介助するのも、浜松から迎えに来て下さったご子息の車にお乗せして見えなくなるまでお見送りするのも、あの頃に面倒をかけた者ばかりであった。

すでに先生が帰られた後だったので、この日の集合写真にはタッチャンだけがない。それが本当に悔やまれる。

それから暫くして先生が旅立たれたことを知らされた。

4. 教師の指導方法

昭和 40 年度の生徒が入ってようやく三学年が揃った学校は若い先生が多かった。また中年以降の先生も若い先生も事務の方たちも、みな名門中学の時より活気があるように思えた。

こんな雰囲気の中ですぐに先生たちのアダ名がついた。

- ・数学 I の先生は授業始めに必ずぼやいた。

「俺はこんな所で教える人間ではない。進学校で教えるのが俺の本来あるべき姿だ。大体教科書が実教出版っていうのは一体どういうことだ！」(アダ名は伏せる)

これが一通り済むとようやく授業に入るのだが全く分からない。授業中に寝る癖がついたのはこの数 I からであって、2 学期の中間テストで 0 点をとってからは数学がますます嫌いになった。

工業高校で数学が分からないのは致命的である。1 年で取りこぼしたのが 2 年になって分かるようになる筈がない。機械科の科目は数学を使うものが殆どだから、お先真っ暗である。そう思い込んで 3 学期の終わり頃には本気で退学を考えるようになった。

- ・実習は腕に覚えのある先生方が一生懸命に教えて下さるので、3 年間楽しく学ぶことができた。己の技を十分に見せて、生徒に要領よく教え、不器用な生徒にも自信を持たせることができる先生ばかりだったのである。

シェーパーを教わったのは国鉄浜松工場におられた方、「メモ魔になれ。」という言葉は何度も繰り返されたし、他の先生方も夫々が工夫をこらした教え方をされた。

- ・機械材料はカーボンというアダ名の先生で、「技術者になるのだから英語を勉強せなあきまへんで。」というのが口癖だった。

製鉄所時代のことや映画の話を交えながらされる授業も面白くて、授業中に寝たことは一度もない。一年の一学期末に「英語が苦手な人は夏休み中に中学の教科書を復習するのいいのやおまへんか。」と言われたので 3 冊まるごとやった。

二学期の最初の授業で「あれをやった人はおますのか？」と聞かれて手を挙げた。あの時にカーボンの言葉を実行しなかったなら、その後に苦手な科目を中学の教科書から復習する機会は絶対になかったと、今も感謝の気

持ちでいっぱいになる。

・二三年生の英語はキンニクというアダ名の若い先生だった。彼がキンニクになったのは、最初の授業で「英語は唇の筋肉に叩き込め！」と言ったからである。

二年生の最後の授業で先生はこう言った。

「二年で使った教科書の単語と熟語を全部覚えろ。新学期の最初の授業で試験をする。」

それで春休みは野良仕事をしながら単語を覚えたり文法を復習したりして過ごしたが、本人が忘れてしまったのか、新学期に試験が実施されることはなかった。

キンニクは大変に熱心な先生であり、毎回授業の始めに行う小テストが、自分もこれで勉強してみようという気を起こさせてくれていたのだと思っている。

・機械設計は「いわゆる」が口癖の若い先生だった。彼はエアカーを設計した人である。イワユルは設計したエアカーを自動車部の生徒たちと試作し、実際に校庭を走らせた。

プロペラを背負った半円の袋が、運動場で土ぼりを舞い上げながら走り回るのを見るのは本当に面白かった。こんな学校に入れて幸運だったなあと考えたものである。

このエアカーは昭和 41 年に新聞やテレビニュースで紹介され、NHKの私の秘密にも登場した。

先生の授業は「いわゆる」が多すぎて何を言いたいのか分からぬこともあったが、いま教科書の書き込みを見れば好きな科目だったことが分かる。

先生は数学が好きだったようで、コンパスと定規で角の三等分をする方法など授業とは関係ない話もしてくれたが、こういう時には先生の「いわゆる」は回数が少なかった。

・二年生から卒業後まで永くお世話になった応用数学の教頭先生は「ダイネ」であった。話の終わりに「……だいいね。」というのだ。これが分かった時に筆者は正の字を書いて回数を数えたが、あっという間に百回を超えたのでやめた。この経験から機械設計の授業で回数を数えることはしなかった。ダイネよりイワユルの方が出現頻度は圧倒的に高かったからである。

先生には国鉄の通信教育（応用数学）でもお世話になった。商業高校卒業の兄は数学が好きだったが、国鉄の応用数学に課される報告課題が難し過ぎたので、筆者が昼休みに職

員室へ行って先生をお願いしたのである。

最初にお願ひに行ったのは二年生になってしばらく経った頃だった。先生は「お前にはまだ説明しても分からんから、ここで見るダイネ。」と言ってパンと牛乳を渡し、私の目の前で一気に全問を解いた。

「満点とはいかんかもしれないが大丈夫だ、これでお兄さんに渡すダイネ。」

それから先生はいつも私にパンと牛乳を与え、目の前で全問を解いた。

兄が名古屋鉄道教習所に送った解答用紙は満点あるいはその近くで、浜松西高で教えておられた先生の実力を思い知らされた。

先生は教頭だったので、放課後は本館から実習館まで全ての扉や窓が締めてあるのを確認して回られた。筆者は落ちこぼれ仲間のMとともに先生が来られるのを待ち、三人で一緒に全館を見て回った。そして先生と駅まで歩き電車で帰った。先生もよく心得たもので数学の話はこちらが話題にしない限り絶対にご自分から持ち出すことはなかった。

筆者は就職後も浜松にある先生のご自宅にお邪魔したが、机に向かって勉強をしておられることが多かった。

結婚式の祝辞をお願いに伺った時も先生は快く引き受けて下さったが、いろいろお話をするうちに招待客のことで叱られた。職場の上司をお願いしてなかったのだ。

「上司の出席しない結婚式があるか！」と叱ったあとで「直属の上司がお世話になっている先輩に早くお願いしなさい。ワシは余興でも何でもやらせて貰うから大丈夫だ。」と言われた。ダイネに叱られたのはこの時が最初で最後だった。

先生は4つの県立高校で校長をされた後に私立普通高校の校長になられ、女子高だったその学校を活性化するため男女共学にして科学技術コースや進学コースを開設された。

この先生は大卒ではなく高等工業学校臨時教員養成所を卒業された方である。

どの学校に赴任されても「この生徒たちを全力で導くのが私の本来あるべき姿だ。」という熱い気持ちを持ち続けられた方である。

先生が亡くなられて奥様をお訪ねした際、奥様の言葉は最初湿りがちであったが、私が先生の口癖を真似て少しずつ入れていくと、「あなたとM君の話をよく聞かされたわ。」と声を出して笑い始められた。教え子として

こんなに嬉しいことはなかった。

5. 工業高校の図書室

図書室には「ローマの休日」の主演女優に似た感じの若い司書がいて、皆の憧れの的であった。筆者は休み時間が来る度に剣道部の仲間と図書室に行き、書架の陰から彼女を見守っていた時期もあった。

同窓会をすれば必ず名前が出る彼女の名をインターネットで引いた時、私たちが知らなかった彼女の一面を知って驚いた。

彼女が書いた論文が国会図書館蔵書検索に数点出てくるし、研究者の方にも引用されている、彼女はそういう人でもあったのだ。

公立高校司書の図書館実践に関する修士論文を書かれた方が彼女の論文を引用しているのだが、これを書くに先立ち彼女のところへインタビューに行っている。

そして、この時のお話などを通じて

- ① 母校は（学校司書にとって）良い学校であった。
- ② 工業高校は民主的な学校が多く司書がいきいきと仕事ができる環境がある。
- ③ このことは生徒にとってもいい学校となるのではないか。

という感じを持たれたようである。

さて、短大国文科を卒業したばかりの新米女性司書が、新設工業高校の図書室を充実させながら生徒の援助をするのは大変な作業であったのではないかと推測される。

だが、彼女の論文には教師たちの様子が書かれているので、その頃の母校全体の雰囲気が見える。全校で一斉に行うLHR読書会の実施についてHR担任に依頼した時の感想である。

① HR担任には忙しい中をいろいろ頼むことが多いが、いつもこころよく引き受けてくれる。

② 熱心な方は自分で問題点を用意し、生徒に討論させるなど、とても協力的である。

同じ論文の中でこうも書かれている。

「その間さまざまな問題とぶつかり実施が困難な状態になる時もしばしばあったが、何とか切り抜けて続けてきた。これもHR担任を初めとする諸先生方の協力があったからである。」

いま彼女は某市の図書館など読み聞かせのボランティアをされているが、どうか、いつまでもお元気だと祈るばかりである。

6. 母校の組織風土

これまで見ていただいたように筆者たちが生徒だった頃の母校は教師による暴力が横行する学校ではなかった。

このことは、暴力に頼らなければ生徒を指導することができない教師はいなかった、ということになるのではないだろうか。これは卒業生のひいき目であるのだが。

さて母校は教師間、教師と生徒間、生徒間での差別もあまり感じられず、本文中にあるように、活発な中にも穏やかに時間が流れる場だったように思う。

そういう中であったからこそ教師や生徒の協力を得て、初めて出逢う工学分野の図書を準備し、全校一斉のLHR読書会を開催し、教科の学習と結びつけたレファエンスなどを成し遂げることができたのではあるまいか。